

ヴォルフラム・マンツェンライター（ウィーン大学）

強力なイメージとオリンピックという大技：映像における日本とドイツのオリンピック

オリンピックは文化のグローバル化を示す完璧な見本である。その（メッセージと重要性という二重の意味での）意義は、世界の人々の大半にゲームというメディア的な存在形式を通して届けられる。グローバルで中心的なメディアとしてテレビが発達する前には、オリンピックの記録映画が公式記録と芸術的な表現の結節点において、この二重の意味における意義伝達の機能を果たしていた。とりわけオリンピック映画には、スポーツを歴史的に一回的な出来事として記録し、非日常的なゲームの「アウラ」を捉えるという課題が付与される。同時に映画には、結果の分からない戦いという象徴的なロールゲームであるスポーツの神話がドラマチックに具体化する様子を表現することが求められる。どのような手段で実体と形式の間で橋渡しがなされるのかを、ベルリン（リーフェンシュタール、1938年）、東京（市川崑、1965年）およびミュンヘン（シュレージンガー、1973年）の夏季オリンピックにおけるマラソンが映画としてどう表現されるかをシークエンス分析しつつ比較する。関心の中心にあるのは、肉体性、民族および国際性がどう表象されるかである。

ヴォルフラム・マンツェンライター

1964年生まれ。ウィーン大学で日本学を専攻。2004年よりウィーン大学東アジア研究所准教授。ドイツ、フランス、日本、トルコで客員教授。最近の研究分野：日本におけるスポーツの人間学的側面、グローバル化時代におけるスポーツの国際的な政治的・経済的側面など。近著に„Governance, Citizenship and the New European Football

Championships: The European Spectacle. (ガヴァナンス、市民と新しいヨーロッパのサッカー選手権)“(2011)、„Social Science Matters: Inquiries into the Current State of the Social Sciences in Japan (社会的・化学的問題 日本における社会学の現況研究)“(2008)、など。